うろこアンソロジー　二〇一三年版

うろこアンソロジー 二〇一三年版 目次

絵 ――少年少女詩集から　倉田良成　3
老樹の丘の眠り　足立和夫　6
やわらかに死んでいった子供たち……　南原充士　9
上海・リリィ・マルレェネ　2013　海埜今日子　11
最後の車両　三井喬子　14
辻さんの詩集を失くした　有働 薫　16
街角にて －酒菜1丁目1番地、書き流し詩、昨年の続編－　冨澤守治　20
枯れた藪を通る　清水鱗造　24
七月の園芸家　沖縄篇　石川為丸　26
朝のバス　おかだすみれこ　32

絵

——少年少女詩集から

倉田良成

スケッチブックを開いて
まんなかに三角をかく
その三角形の中にせいかくによっつ
三角形をかく
みんなおんなじかたちの三角でなきゃいけない
とがったほうを上にしたみっつの三角のそれぞれに
黄
赤
青
の色をクレヨンでぬりつぶしていく
大きな三角のまんなかの

とがったほうを下にした三角を
クレヨンのぜんぶでぬりつぶしたら
まっくろな、真のあんこくになる
けれど
クレヨンじゃなく
黄色
赤色
青色
のひかりをそこにあつめれば
まぶしい、真の白色になるのさ
大きな三角のまわりをみっつの角が触れるようにとりかこむ輪をつくり
それをさらにうちがわにとりこむもっと大きな三角をつくる
さっきまでの大きな三角のうちがわの三角のおのおのにも輪をつくり
そのまたうちがわに三角をつくる
こうしてそとへもうちへも色から色をかさねて
かぎりもなく殖えつづけ

割れつづけていくのだけれど
そのちゅうしんにはむげんのやみと
むげんのひかりとがある
むかしの、物をすこしでも知った人は
これを、まんだら
と言ったのさ
こうしてせいみょうきわまりない極彩色のきゅうでんをかいたあと
絵は
だいちの風とともに去る

老樹の丘の眠り

足立和夫

ふたたび沈黙と夜がはじまり
ひろがる草原をつつんでいく
草男は気づかないうちに
生きていた
驚きが腹のなかでまわっている
すべてがわからないが
黙っていた
死についても黙っていた
わずかないのちの声
それがすべての予感であった

この世が在ることは
草の葉が微風に迷って
とんでもないなにかを
指し示している事なのかもしれない
そこに手が届くことはないだろうが

草の息たちは
波立つままに生きている
ひとの息も波立つままだ

ひとは夜に囲まれておもうものだ
どこにも到達しないことを
なぜだろうかと
からだの言葉を呼んでいる

果てのない未知の入口で眠り

迷路の深さを進むために
心の永い触手をゆっくりのばし
ためらいながら探っている
ひとはなにも知らないことを

知らないことを知るために
眠って夜の手の感覚を働かせる
ひとができるのは
しずかに眠っている智恵を呼ぶだけなのだ
ということを思い出して
微笑する老樹の丘でくつろいでいる

草男は夜のなかで
別の高い山を登っていた

やわらかに死んでいった子供たち……

南原充士

やわらかに死んでいった子供たち
お座り
固い木の椅子に綿を敷き
おまえたちの幼いお尻が痛くないように
おおいい子だ　みんな
おなかが空いて銀のお匙をなめている
お上がり　乾パンとスウプを

すすを払わないうちに　どうして
冬がまた来てしまったの
お父さんの肖像画よ　すみません

くさったトマトのような夜が来る
あらしだよ
みんなおやすみ　子供たち
かわいい狼の生まれ

上海・リリィ・マルレェネ　２０１３

海埜今日子

せぐくまる床磨きの後方で、くっきりと雨なすスクリーン。名前のない不便さから、まず口笛が選ばれた。マデリン、マデリン、上海にいった彼女への挽歌を口ずさみながら、この場を嘆くことなく廊下をわたる。入口であって決して出口でない場所へ。ここには迷路という簡潔も残されていないのだ。マデリン、リリィ、床がキュウとうなりながら、ハミングの抹殺を遅ればせに、ラッシュからのように投げるのが目撃される。

ひからびた背からそそぐ動作もまた、機敏ではない劇を進行させる一端として、対比させられていたのではなかったか。マルレェン、リリィ、あんたの塗られすぎた嬌態が、床のうえで崩壊するまで拭きつづけるがいい。アミィ、アミィ・ジョリィ、指のきざんだ予告は床のうえに彫っていたんだね。祈りとしての鼻歌は、あんたにも口笛をいとしみながれ、追いつくことがないのだから。

（ト書きとして）上海はセットされつづけ、幻の大陸の方角から、砂塵は吹くことをやめなかっただろう。キャバレーの灯りが、ランタンをかき抱き、刻まれた皺の数だけ、ひきのばす迷路が、つかのま用意されては拭われる。ジョリィ、ロォラ、ジョリィ、靴を脱ぎすて、追いかけたものの正体を知るために、あなたを憂うことを磨いていたの。あたしはヒールが高くてやりきれないって歌ったわ。床をすべる挽歌のわずかな嘆き。

廊下は隔絶されながら、入口を求めていた。どこにもない出口からもぐりこんだ床磨き。ひらたくなった手のひらに、舶来のみやげもの。壊れてばかりなら、惜しみなくつぶしてやる。ロォラ・ロォラ、磨かれた床には、あんたのやましい踊りが永遠に映し出されているといい。裸足が砂のなかに、しない音をめりこませていた。マデリン、マルレェン、マルレェネ。嘘だろ、天使見てきたような、だよ。

変革されない出口が足音のさらなる場所からついてまわる。口紅で描いた否定は、番人としてスクリーンを肯定しつづけるだろう。鍵はガーターにすべりこませて。ディートリッヒ、生産された雨にあなたの瞳、ひきさかれた床のようにむすばれていたから。花

はどこにいった、あのランタンの下に、観客がむせび泣いて。ハニー・サックル・ローズ、散り始めたので、出番です。よ。

最後の車両

三井喬子

扉が開く
少しして閉まる

二つの出来事の間には
差し挟まれたモノはなく
肌触りと　匂いと　感情だけが移動した

嫌がるモノを逆さに吊るし
扉があいたら放り出してやろうと構えているが
閉じた隙間は　広がらず震えず壊れない
排出口のトジルという意志の固さよ

わたしは　これから何処へ行くのだろうか
まとわりついて　蹴飛ばされて
猫のようにうずくまる
リセイは相変わらず勢いが良いが
それは　全ての出来事を説明するものではない
全ての未来を予測するものではない

あの白いホームに降り立つべきだったのか
押されて
素早く
電車を見捨てるべきだったのだろうか
ゆっくり通過する駅名標
白い　無人の　プラット・ホーム

辻さんの詩集を失くした

有働 薫

小田急線の車内で辻さんの詩集を読んでいた
乗換駅の地下道を歩きながら次の車内で続きを読もうと思った
ホームに降りる前にトイレに寄った

夕方
帰りの車内で
詩集が無いのに気づいた

今日一日の自分をたどり直した
詩集が自分と一緒のすがた
詩集がかばんの中だと思っているすがた

詩集がかばんに無いと分かったすがた
詩集はいつ自分を離れたのだろう
詩集をいつわたしは手放したのだろう

詩集はいまどこにいるのだろう
わたしは詩集を忘れて
他のことに気をとられていた

電車の車内で詩集を読んで
ショックを受けて
このことは大切だと思った

やがて忘れて
一日を終えて
また詩集に戻ろうとした時
それはもうわたしから離れていた

（だいじなものを
へいきでなくしてしまうような
そんなだらしない
女なんです）

今頃詩集はどこを歩いているのだろう

翌朝早く
携帯が鳴って
若い駅員の声だった
お探しの詩集
トイレのゴミ袋からみつかりました
早朝に失礼ですが
はやくお知らせしたほうがとおもいまして
身分を証明するものを持って

引き取りにおいでください

街角にて

－酒菜1丁目1番地、書き流し詩、昨年の続編－

冨澤守治

世界はあざやかである
そしてこの街角もまぎれのないもの
街角は騙されることもなく、自らを不明にせまらせることもなく
息を吸い、吐き、そして生きてきた

しかしひとは幸福をつかむためには、他人に「かんけい」を求め
どうしても誰かの肩をいきなり、これまたつかまなければならない
恐怖と不快をさけるためには
こちらの容姿や、礼儀や、あるいは他人の欲求に応えなくてはならない

これだけでも他人と「私」の溝の深さが、底なしに見えてくる

街角は一応は安全ではある
しかし本当にそうであるのか
以前にも疑ってみたこともあるが
ほんの少し前からふたたび疑いを持ちはじめている

この街角と世界は、これから何十年かも健やかであるのか？
誰も答えを持ってはいない

街角は街路へと続いていく
行く男と歩み向かって来る女
誰も無粋ではないか、着飾っているか
好ましいものか、不快であるか
幾つもの印象を残していく

このひとたちはこのあとも何年か、どうしていくのだろうか

そして人生の理想は?、何を達成していくのだろうか?
問いばかりが残ってしまい、この時間もまた過ぎ去っていくだけ
街角はいつでも無人の、透明の色に戻ろうとする

私は手をかすこともできないのだろうか
そしてこの私の、居ても立ってもいられない誠意と不安とは!
なにものなのだろう

街角は?
これだけあざやかに姿を佇ませているのに
かくも不安が付き纏う、街角

つまりは
街角はひとを誘う
しかしひとは孤独である
これは同じことの両面なのだ

しかしてうまく自分を包み込む幸福な世界を達成したものは、
これもまた少ない

街角にとって、この私も
行く雲と同じ、さまよえるひとの、ただひとり
それでしか無いのだろうか

そうでないように願う
しかし同じ言葉だけを、いつまでも私は思い続けている

枯れた藪を通る

清水鱗造

枯れた蔓の葉を指で挟むと
予想した以上に細かい粉になった
夏には青みがかったうまそうな実がたくさん成っていた
たぶん小鳥がついばんで
遠くへ運んでいったものもあるが
いまは小さい髑髏のような陰影を持つ
濃い青の乾いた粒が残っている

白っぽい藪を歩くとき
足元でかさこそと
乾燥した落ち葉が囁き合っている

冬の光に満ちた藪を進むのは
ひょっとしたら
僕ではないのかもしれない
それは僕が知っている人が
僕のぬいぐるみを着て
歩いているのかもしれないと
かき分けた手に視線を走らせる
明るい藪に
二秒間ほど
夢がよぎったようだ

七月の園芸家　沖縄篇

石川為丸

七月はサガリバナ
薄桃の総状花序が
夜風に揺れて
甘い香りをただよわす
沖縄の夜はいい
だが昼間の園芸作業はたいへんだ
暑さのために乾いて固まった土を
中耕してやる必要があるからだ
炎天下の作業は熱中症で命取りになる
いきおい園芸作業は夕方に集中することになる
ここ沖縄では掘り出すガラクタが夥しい数にのぼる

ジョッキの破片、折れ釘、針金、チョコレートの銀紙、
察するに、いかに深く埋められたとしても
土地がそれらを異物として受け入れず
徐々に地表に押し戻す作用があるらしいのだ。
底のすり減った軍靴、パラシュートの紐、薬莢、
その他、数えきれないほどたくさんのものが耕作地から出てきて
園芸家を驚かせる。
ここ沖縄では思い切りよく鍬を入れるわけにはいかない
不発弾が出てくることもあるのだから
細心の注意を払って掘り返す
効率が悪いうえに
しかも夕方の限られた時間で行う作業なので、何日もかかってしまう。
七月は中耕で始まり中耕で終わる。
夥しいガラクタの中に
アメリカ製のドラム缶が出てくることもあった
ベトナム戦争で米軍がばら撒いたダイオキシンを含む枯葉剤だ

こんなときにはもう園芸家の手には負えない
ではどうすればいい？
七月の園芸家は無力感に打ちひしがれる
夜闇に揺れるサガリバナも
ものがなしい
七月の沖縄の夜

（カレル・チャペック「園芸家12カ月」に負う）

（注）1　総状花序――下から上へ、あるいは周りから中心部へ咲いてゆく無限花序のひとつで、柄のある小花が長い円錐形または円柱形に並び、下から咲いていくもののことである。
2　ダイオキシン――有機塩素化合物のポリ塩化ジベンゾオキシン（ＰＣＤＤ）とポリ塩化ジベンゾフラン（ＰＣＤＦ）の総称。極微量でガンや生殖器障害などの原因になる物質で毒性が極めて高い。ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤もダイオキシンの一種。枯れ葉剤がまかれたベトナムやアメリカのベトナム帰還兵の子供や孫に多数の「奇形児」がうまれている。健常者同士が結婚しても、その祖父や祖母がダイオキシンに影響されていて、奇形児が生ま

れているのが現状だ。ダイオキシンはＤＮＡを破壊するので、何世代が影響を受けるのか、未だに不明である。しかも治療薬がないという。

朝のバス

おかだすみれこ

今日からメマイ始まる
ほんのすこし視界が揺れると思っていた
通勤バスにはすぐすわる
座ってから手すりをつよく摑んでいる
じぶんの手を見て変調を知る

たとえばつい最近愛しいものをなくしたひとがいても
誰も何も気づかない
そのひとは誰にも労われることなく
前を向いてバスの中で立っているか
うまくすわれて窓の外をみている

人々はそれぞれの目的に向かうために
決意をしてバスに乗ったので
足を踏ん張って立っているとか
手すりを強く握りしめているとかは
緊張感にかき消される

ふと何かを思い出して
ステップを降りる足どりが遅くなるとき
じょうずに駅までは行ったのに
もういつもの電車には乗れない
どこまでも夏が終わっていく
区切りがない
終わりがあるだけでそれが続く

懐かしい症状のメマイに

わたしもゆっくりと引き戻される
かたい決意をしたかのような朝のバスが
閉ざされて背後にある
もう運転手さえいない